

# GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 57  
2021 AUTUMN

# 『「フクシマ」論』から10年を経て

## ——学府で培った学問的基礎体力—— 開沼 博 准教授

2021年度より准教授として情報学環に赴任された開沼先生に、学際情報学府の院生時代のことから現在の問題意識と展望について伺いました。



——先生は学府のご出身ですね。  
今日に至るまでのご経歴をお聞かせ下さい。

2009年に、修士課程・文化人間情報学コースに入学しました。指導教員は吉見俊哉先生です。入学当初から、「福島になぜ原発ができたのかを歴史社会的に研究することを通して日本の近代化を問い直す」という研究計画を立て、その通りに修士論文を書きました。2011年の1月に書き終え、そのテーマでやることはやり尽くしたので、博士課程ではもう少し違うことをやろうと思っていたときに、東日本大震災がおこりました。ちょうど博士課程に上がるタイミングでの震災発生です。その後は、福島の状態の分析・考察が研究の軸になっていきました。2012年からは福島大学の特任研究員として、2016年からは立命館大学で准教授として研究を続けました。幸いどちらの大学にも自分の研究テーマ・関心を深められる環境を用意していただき、継続的に東日本大震災後10年間の、福島にかかわるさまざまな社会的、政治的、あるいは科学技術的なことを見続けることが出来ました。そしてこのたび情報学環に着任しました。

実は、私は情報学環教育部研究生もやっていたし、また文学部の学部生だった頃から、情報学環とは、色々に関わりがありました。例えば、当時、山内祐平先生がマネージメントをされていた、iii onlineのオンライン授業コンテンツ制作のアルバイトとして、撮影編集に従事しました。多様な学問分野のコンテンツを当時まだ発展段階であった媒体に展開する作業は、さまざまなものを横糸のようにつなぐ「情報」その進化の過程を目の当たりに、実体験として学ぶ機会になりました。研究をすすめる上でも、これらの経験は大いに役立ちました。こうして私が、育てられたこの情報学環に、また来られたことを大変うれしく思っています。

——最近のご研究と、学環にて取り組みたい研究など、差し支えない範囲で教えてください。

東日本大震災から10年という、いわゆる節目と呼ばれるようなタイミングで、結局、何が課題で、それがどこまで解決され、今、何が残っているかということ

を考える作業をおこない、アウトプットをしてきました。これは政策的な意味であったり、社会や心理に関わる問題であったりということですので。これからは、もうちょっと抽象度を上げた広い視野でものを考えるということ、例えば歴史的な軸を引いてみたり、あるいは情報学環にきたからこそできるような、他のさまざまな分野の方とのコラボレーションなど、腰を据えてやっていかなければならないと考えています。

具体的には、原子力災害とか原発事故というものについて、原子力工学や放射線防護など、既存の研究分野はありますが、ずっと10年間この問題に関わってきて、それが社会的にどう影響を及ぼすのかということでは、極めて手薄であると感じています。理系の専門分野では解ききれない問題はまだまだ山積んでいます。例えばもう一度、原子力災害が他国で起こったらどう社会的な影響があるかシミュレーションができないか、とか。また、原子力災害プラス地震と津波というような複合災害における社会的な防災、対応策を考えるという作業はやりたいと思っています。

——先生のゼミは来年度から本格稼働とのことですが、来るべきゼミ生、そして、学府の学生に期待することは？

ゼミに関しては、方法論、理論で通じる部分があれば、必ずしも研究対象が、私の専門と近い内容である必要はないと思っています。私自身、全く自分の関心と重ならないようなことを対象とした研究をやっている先生方・ゼミの先輩方などからも指導頂いたことが、結果としてよかったと思っています。例えば、原発と言ったら、地域社会学、環境社会学、科学社会学といういかにも関係しそうなジャンル分けのもと、その何処かに足場を置いて学ぶというのが王道だったかもしれないけれども、そうしていらいまの自分のオリジナリティはなかった。吉見先生のゼミもそうだし、学府全体も、雑種が育つのに良い環境です。大学の中や外で、普通であれば接することのない領域の方と接するための基礎体力を作ってくれたと思います。

視点をずらしてモノを見る、視野を広げる。全く違った立場に立っている人たちの言葉を両方聞いて、皆が目を向けていない資料を読んで、最後に何が事実なのか、何が掴むべき核心なのかと判断する。特に情報社会の中ではそれが難しくなっています。大量の情報が勝手に向こうからやってくる中で、自分が見たいものの、既に見ているモノ、持っている信念を強化することに誘導されるような情報環境がより明確になっています。そんな現在において、普通は出会わないようなものに出会って、そのミゾを感じるという事が、重要ですし、学環・学府にはそのために必要な土壌があると思っています。その良さを自分の研究に活かしたいという方に積極的に学びに来ていただければありがたいです。

## B'AI Global Forumの研究者・アシスタントによる研究会「BAIRAL」

BAIRAL(B'AI RA League)は、B'AI Global Forumという研究プロジェクトの研究者・アシスタントが主体となって、月に一回のペースで開催している研究会です。2020年7月、東京大学とソフトバンクが共同で立ち上げた、AIテクノロジーを包括的に研究する「Beyond AI 研究推進機構」組織の「AIと社会」部門の中にあるB'AI Global Forumは、AI時代における情報テクノロジーとジェンダーやマイノリティの関係を考え、課題を発見し、解決に向けた提言をしています。こうしたB'AIの活動の一環として、BAIRALは毎月様々なゲストスピーカーの方をお呼びし、情報テクノロジーと社会の関係について理論・実践の両側面から検討しています。AIに関する最先端の取り組みについて学び、議論するだけでなく、様々な専門分野の若手研究者をつなぐ、開かれたネットワークを構築することがBAIRALの目的です。

記事：加藤大樹(博士課程)、田中 瑛(博士課程)、イム ドンウ(博士課程)



## 東京大学制作展2021 Extra “OPUNK” 開催報告

2021年7月9日～12日の4日間にわたり、東京大学制作展2021Extra「OPUNK」をオンライン上で開催しました。体制への反発から始まったPUNK、0は新しいものが生まれる場所を表します。本番展示のためのプレ展示として開催された今回は、新型コロナウイルスの感染拡大状況を考慮し、去年に引き続きオンライン上での開催となりました。さらに7月10日には、高校生の皆様にもこの活動を広めるべく、東京大学のオープンキャンパス企画のひとつとしてウェビナーを開催しました。学際情報学府や情報学環教育部の学生が中心となり、先生方にもご指導いただきながら、どのように“PUNK”をすることが出来るか考えながら、新しい表現のカタチを体現しました。また、企画から実施まで全てをオンラインで行う中で、ユーザーエクスペリエンスにもこだわり、2000人近くに及ぶ方々にご来場いただきました。

記事：市倉愛子(修士課程・東京大学制作展広報担当)



## 渡邊英徳教授の共著書が第11回「広島本大賞」を受賞

第11回「広島本大賞」に、庭田杏珠さん(教養学部前期課程2年)と渡邊英徳教授の共著『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』(2020年、光文社)が選ばれました。「広島本大賞」は広島県の書店員によって広島の魅力あふれる本を選定する賞で、本作品は2019年11月から2021年3月までに出版された11のノミネート作品の中より受賞しました。渡邊教授と本学学生で広島出身の庭田さんが2017年から取り組んでいる「記憶の解凍」プロジェクトの成果をまとめた本書には、最新のAI技術と、当事者への取材や資料をもとにした人の手による彩色によってカラー化された戦前から戦後にかけての写真355枚が収録されています。

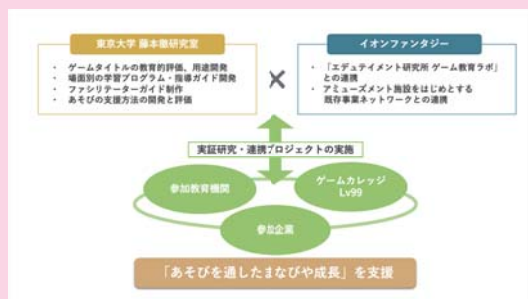
記事：柳 志暎(博士課程・編集部)



## イオンファンタジーと藤本研究室の共同研究開始

株式会社イオンファンタジーと藤本徹研究室は、デジタルゲームのあそびをまなびに接続する共同研究を開始しました。この共同研究は、イオンファンタジーが推進するエンターテインメントとエデュケーションをかけた「エデュテインメント」によって「夢中になって楽しむうちに子どもの能力が最大限に引き出され、こころ・あたま・からだに成長してゆく」環境を実現するために、理論枠組みや実践方法を確立することを目的としています。人気デジタルゲームタイトルを対象として、まなびや成長に寄与するコンテンツやあそび方の評価、授業や課外活動等に導入するための学習プログラムや指導ガイドの制作、あそびの支援方法の開発と評価を行います。プロジェクトに参加する教育機関や企業等で試行的な導入を重ね、研究成果を広く社会へ提供いたします。

記事：柳 志暎(博士課程・編集部)





開 一夫

教授

富山県立山町出身。専門は赤ちゃん学、発達科学、人工知能です。1万名を超える赤ちゃんに協力してもらいながら、人間の不思議について探求しています。赤ちゃんの研究手法から生まれた絵本は累計60万部を超え、米国でもベストセラーになっています。最近、大型プロジェクトのリーダーとして、テクノロジーによる学びについても研究しています。



福島真人

教授

人々の現実の思考・認識・学習の在り方を、さまざまな現場の長期観察と全体のシステムのマクロ分析の双方向から研究しています。現在の関心は科学技術における実験概念とそれを取り巻く諸分野(政治、経済、文化)における同概念の横断的比較研究。また現代アートを形成するアートワールドがもつ、技術インフラ的な側面等も調査をしています。



板津木綿子

教授

総合文化研究科より流動教員として参りました。社会的マイノリティの社会史、文化史に取り組んで参りましたが、特にレジャースタディーズ、ポピュラーカルチャー、ビジュアルカルチャーに関心を持っています。学環では、B'AIグローバルフォーラムでの活動を通じて、デジタル情報技術と人間社会についてさらに研究を進めたいと思っています。



松田康博

教授

東洋文化研究所から参りました。中台関係を中心に東アジアの国際政治を研究しています。日常的に中国語情報にどっぷりと浸かっています。中台関係とは、国内とも国際とも言えない、破局しそうで破局せず、経済的な相互依存が進んでも相互理解が全く深まらない、非常に特殊な例外的関係で、興味が尽きません。学環では、アジア情報社会コース(ITASIA)での教育に2008年から携わっています。



久野 愛

准教授

専門は歴史学で、文化史、技術史、経営史を横断したアプローチから、特に米国における消費主義社会の拡大と社会規範・文化的価値観の変化について研究してきました。近年は、感覚・感情の歴史に焦点を当て、技術や産業の発展がいかに人々の五感の感じ方に影響を与えてきたのか歴史的分析を行っています。今後は文理融合の学際的研究にも取り組みたいと考えています。



開沼 博

准教授

福島を対象にした人文・社会科学的な研究を主なテーマにしています。3.11という世界史的な事件、大規模複合災害を経験し、いまもそのさなかにある対象を深掘りすることは、社会と心理、災害や復興、地域・文化・科学技術・メディア等々が複雑に交差した地点を探求する作業に直結しています。学環の自由な雰囲気の中で刺激を受けられることを楽しみにしております。



永石尚也

准教授

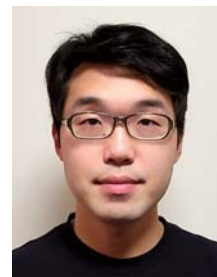
決め難い不確実な状況でも決定することが避けられない……という瞬間は多々ありますが、法哲学の見地から、不確実な科学的状況・政治的状況下における法的決定における諸問題(決定自体のリスク・責任、正統性確保等)を研究しています。近頃は脳科学倫理上の課題にも取り組んでおり、研究諸分野間の「決め方の決め方」にも関心を持っています。



道方孝志

准教授

近年、第5世代移動通信システム(5G)、IoT(Internet of Things)、AI(Artificial Intelligence)などの情報通信技術が飛躍的に進歩し、経済社会への展開が急速に進んでいます。こうした技術がもたらす社会への影響、円滑な普及展開方策、社会制度の在り方などの情報通信技術政策について研究しています。



韓 燦教

助教

元々の専門は光通信でしたが、最近ではヒューマンコンピュータインタラクションの研究をしています。具体的には好みの物理インタフェースを簡単に作れるシステムを開発したり、実物体を使った入力インタフェースの仕組みを作っています。人と情報が交わり合う未来を目指して研究を進めていきます。



小田中 悠

助教



LEE Minjoo

助教

数理社会学、計算社会科学を専門としています。嘘(人狼ゲーム)や詐欺をゲーム理論で分析してみたり、テキストマイニングを用いて歌詞やクラウドファンディングの分析を試みたりしています。また、災害時の保健医療福祉チームの行動を支援するシステムの開発にも携わっています。

日本における貧困や労働に関するメディア言説分析を行っています。特に現在は平成時代のテレビドキュメンタリーを主な分析対象にし、貧困や労働をめぐる様々な価値や規範が再構築・再規範化される過程を番組フォーマットや手法との関係の中で考察しています。研究以外では、学生支援、特に女子学生や留学生支援に携わることができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## CONGRATULATIONS

### 令和2年度 大学院学際情報学府 学位記授与式

2021年3月19日、学際情報学府の学位記授与式が福武ラーニングシアターで開催されました。去年は残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大防止のため対面による式典は中止となりましたが、今年度は二部制での対面式典とオンライン生配信という形式で行われました。第一部には社会情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コース、生物統計情報学コースの修士42名、博士3名が参加し、越塚登学環長(当時)より学位記が授与されました。また、第二部には文化・人間情報学コース、先端表現情報学コースの修士41名、博士2名が参加し、前田幸男専攻長より学位記が授与されました。

記事: 柳 志暎(博士課程・編集部)



学位記受け取り代表者の小笠原佑樹さん(修士課程代表・先端表現情報学コース)



令和2年度学位記授与式

### 令和3年度 入・進学ガイダンス

2021年4月1日、学際情報学府の入・進学ガイダンスが福武ラーニングシアターで開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、コース別の二部制に分かれて実施されるとともに遠隔でも視聴できるよう、その様子がオンラインで生配信される形式となりました。オンライン参加の31名と対面での出席者78名(第一部44名、第二部34名)の計109名が参加し、山内学環長より祝辞が贈られました。

記事: 柳 志暎(博士課程・編集部)

### 令和4年度 修士・博士課程合格発表(2022年4月入学)

2021年8月27日、令和4年度修士・博士課程(夏季募集・2022年4月および2021年10月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程248名、博士課程13名でした。最終合格発表者は表の通りです。

修士課程最終合格者数		博士課程最終合格者数	
社会情報学コース	13名		
文化・人文情報学コース	11名		
先端表現情報学コース	27名	先端表現情報学コース	3名
総合分析情報学コース	18名	総合分析情報学コース	2名
生物統計情報学コース	12名		
合計	81名	合計	5名

## BOOKS



### 科学技術社会学(STS) テクノサイエンス時代を航行するために

日比野愛子/鈴木 舞/福島真人 編著  
発行年月:2021年8月 出版社:新曜社

現代社会はテクノサイエンスからできています。その迷路に切り込むための最先端の手法、STS(Science and Technology Studies:科学技術社会学)のエッセンスを、自然、境界、過程、場所、秩序、未来、そして参加という、七つのキーコンセプトを中心に、理論(国際的な標準)と実践(多様な社会学者たちのユニークなコラム集)で幅広く包括的入門書です。(教授:福島真人)



### 理系女性の人生設計ガイド 自分を生かす仕事と生き方

大隅典子/大島まり/山本佳世子 著  
発行年月:2021年5月 出版社:講談社

今、科学技術と社会の関わりあい方が大きく変化し、理系のすそ野が広がっています。理系女性はまだ少数派のため、キャリア形成や、ワーク・ライフ・バランスへの対応などについて知る機会がありません。本書を通して、研究以外の理系のお仕事など、多様で多面的な理系の魅力を知っていただくことが、理系に進むきっかけになればと思います。(教授:大島まり)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

---

【あとがき】

今年は2011年のあの日から、ちょうど10周年にあたります。巻頭インタビューでは、学際情報学府出身で、「フクシマ」の問題を社会的に研究してこられた開沼博先生に迫りました。情報学環のインター・ディシプリナリーな研究環境が、今の開沼先生のベースになっていることがよく分かる内容です。他にも今年着任された先生方のご研究が分かりやすく紹介されています。これを読むだけで、学環研究者の多様性が一目瞭然！ですね。緊張をはらむ東アジア情勢、マイノリティや文化表象、IT時代の技術と文化、そしていつの世も、希望の光である「赤ちゃん」、これからの未来社会のために重要な課題がここではたくさん研究されています。(岡 美穂子)

GAKKAN 57 2021.11

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 岡 美穂子、神谷説子、福嶋政期、山内隆治、柳 志岐

デザイン: マルヤマデザイン(丸山智也、野中優衣)